
お目覚めはイケメンから

sachi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お目覚めはイケメンから

【Nコード】

N6327Q

【作者名】

sachi

【あらすじ】

17歳の小柳美和は、朝起きたらロココ調のお部屋でイケメンと寝ていて、びっくり仰天！さらに追い打ちをかけるように、自分が人妻で妊娠していると知らされ・・・？ 気付いたら異世界トリップしていて、年までも進んでいた少女の異世界恋愛コメディー。のつもりです

気付いたら異世界でした。

今私はとても驚いている。

「ちよっ・・・え？」

だつてさあ、一人で寝てたのに起きたら近距離に男の人の顔があるんですよ？

ただでさえビビリで人見知りなのに、ここまで男性と進展しちゃってるなんて驚く他ないと思う。

何があつたんだ！！私にいったい何があつたんだ！！

思い出してみたけど、無理です。

おつかしいな・・・普段から忘れっぽいけど、こんな衝撃的なこと忘れるほど脳細胞は死んでないと思うけどな・・・。

よし！もう一度考えてみよう。

昨日は・・・

学校から帰った。

塾に行った。

帰ってきてからで大好きな異世界トリップものの小説を読んだ。

夜遅くになり、さすがに寝ないといけないから、と思い寝た。

え？終わっちゃったよ。

何処にも男と会ったなんて項目ないじゃん。おかしいじゃん。

も・・・もしやこの人は、強盗&強姦魔！？

寝込みを襲う卑怯な奴なのか！？

う、嘘・・・逃げないと・・・！！

そう思い逃げようとして身を動かしたら、相手の瞼が動いた。

「ん・・・」

ああ・・・何やってるんだ自分！！ゆっくり動かないとダメじゃないか！！！！

しかし、時すでに遅し。相手は瞼を開け眩しそうに、こちらを見ていた。

うわお、随分と綺麗な青色ですね！！てか随分と綺麗なお顔ですね！！とゆうか近いですね！！！！

なんて余計なことを考えていたら相手が口を開く。

「おはようミフ」

・・・なんで私の名前知ってるんですか！？

というか、おはようと言いながら額にキスしないでください。心臓に悪いです。

誰なんだコイツ。元々人見知りで、女子校だから男とはあまり面識がない。

だから、男の人とベットで寝てるなんてありえない。
なのになんで私の名前を知っているのだろうか。

「どうしたんだ？・・・体調が優れないのか！？」

いやいや。なんで挨拶しないだけでそんな結果になるんですか。
あなたは短気なんですか。そうなんですか。

「それなら直ぐに医者と呼ばないと。お腹の子に何かあったら困る。」

・・・え？

ちよっと待って。凄いこと言わなかった？

ウソだろオイ。１７でお母さんですか。ていうかいつの間に乙女じやなくなってるんだ。

知らねえよ。なにがあったんだよ。何があったんだあああああ
！！！！

私はこの時何かが外れたんだと思う。

大丈夫か？という声とともに頬にあてられた手を払いながら起き上り、こういった。

「乙女になしてくれとるんや！このイケメン野郎！！！」

イケメンの顔がとても驚いている。そのことに満足しながら私は続けた

「いくらイケメンだからって乙女に手エだして言い訳ねーだろーが！！その辺もう一度学校行って学んで来い！！！」

普段あんまり自己主張しない分、言ってしまった。

あ。。。やらかしてしまった。どーしよう殺される。

短い人生だったなア。でも楽しかったしいいか。

そう思うと逆に冷静になった。辺りを見渡してみたら、なんだ此処！？超豪華なお部屋ではないか。

まるで中世のお城のようなロココ調のお部屋は此処を異世界だと主張しているみたい。

長年夢だった異世界に行けるなんて妄想を抱かせてくれてありがとうイケメン。感謝するよ。

さあ、私を殺すがよい！！！！わたしは目をつむり身構えた。

・・・

あれ、何も起こらないぞ。恐る恐る目を開けるとイケメンのとても驚いた顔が映る。

ん？どうしたんだろうか。

殺すなら早く殺して！！！ダメないでください。逆に怖いです。

「あの・・・殺すなら早く殺してください。」

思わず言ってしまったよ。

するとイケメンがもつと驚いた顔をした。くそう驚いた顔までカッコイイな！

「な、何を言ってるんだ・・・？やっぱり何処かおかしいんじゃないか！？」

ガバツと体を起こしてイケメンは突拍子もないことを言う。

はあ・・・？おかしいのはそっちでしょ。

「なんなんですか一体！？あなたは強盗&強姦魔なんですよ！？」

て考えたら、こんな豪華な部屋が自分の部屋なわけないから強盗ではない。

でもこの際どうでもいいよ！

「・・・ミワ。自分の名前は分かるか？」

はあ？当たり前だ。

「当たり前じゃないですか。小柳美和ですよ。」

「俺のことは？俺のことは分かるか？」

イケメンが焦るように聞いてくる

「知るわけないじゃないですか。むしろ教えてほしいですよ」

そう言った途端、イケメンはベットのの上に崩れ落ちた。

しかもかなりの負のオーラが漂っている。え、な、なに！？

なんか私悪いこと言った！？言っていないよね？？

どういうことだ・・・なんてイケメンが呟いている。しらないよ！

！こっちが聞きたいよ

暫くするとまた起き上りすごい勢いで聞いてきた。

「ミワ、今何歳だ！？」

「え・・・１７ですけど。」

そんな・・・ありえんとイケメンは言いながら頂垂れる
なにか関係あるのだろうか？

暫くたってからイケメンはこう切り出した。

「ミワ、信じられないだろうが、お前は今２６だ。」

え・・・？何かの冗談ですよね？？

「そして俺の妻だ。」

・・・え。今この人なんて言った。妻って言わなかった！？

言っ たよ ね！？言っ たよ ね！？

うそ・・・小柳美和17歳。気付いたら26で人妻になってました。

気付いたら異世界でした。(後書き)

初めまして！ 勢いで書いてしまったので矛盾するかもしれません。

ミワちゃんは、見た目平凡で思い込みが激しい人見知り少女ですが、吹っ切れると口が悪くなります。

私って嫌われ者！？（前書き）

いやーホント文才がないですわ。読みづらいかもです・・・。

私って嫌われ者！？

人生、一度や二度のびっくりする体験くらいあるだろう。
でも・・・でもさ？

いくらなんでもこんなにぶっ飛んだ体験はしないでしょ。普通は。
なんだかあまりにも現実離れしていて、逆に笑えてきた。

「あはははは・・・なんだこれ」

なんだよ。私のキャハハウフアハハな青春は何処へ行っただよ。
恋もろくにせず、気付いたら人妻とかマジで笑えるわ。ははは

暫くなんの言葉も出なかった。というか何も頭に浮かばない。

「そうか・・・。本当に・・・覚えていないんだな。」

あ、イケメンが喋った。

覚えてるも何も、私としては何が起こってるのか分からない状態で
す。

というか、そんな美声で悲しそうに喋らないでください。物凄く罪
悪感を感じます。

「申し訳ありま、せん、ゝ、ゝ。」

思わず謝罪しちゃったよ。あれ？私、悪くないよね？？この場合、
誰も悪くないよね？

だよな？むしろ私、被害者だよ、ね？？

動揺しすぎて何が何だか分からなくなってしまった。

「いや、いいんだ。ミワが悪いわけじゃない。」

おう。イケメン優しいな。ちゃんと心を汲み取ったのか。さすが大人の男だ。いやー感心したよ。なんて思ってたなら、いきなりイケメンの胸らへん（身長差があるあらね）が近づいてきた。

・・・え？どーゆー状況ですかコレ。近づいたと思ったら、まさかこの状態は、抱き締められているという感じですか。

嘘だろオイ。マジか。真剣なのか。

そういうの慣れてないんです。

やめてください。ガチで恥ずかしいです。恥ずかしすぎて

うおおおおおおあああああああ

なんて心の中で絶叫してしまうよ。

だってだってさ、こんなイケメンに抱きしめられてんだよ！

そりゃ誰だってこうなるでしょ。いや確かにイイ体だから別にいいかもなんて思ってたけど。

思ったけれども！ てか誰だって思うでしょイイ体だったら。

いやよ、もーホント。あれ？自分が壊れそう。

悶絶してたらイケメンが耳元で囁いた。

「悪くないんだ。けど、、俺のことも覚えてないんだろ？」

うう。確かにそうです。申し訳ありません。

というかそんな腰にくる美声で囁かれたら本当にダメだわ。

でも、確かに自分は知っているのに、相手は知らないなんて悲しいよね。

私だったら悲しくて、その人のことを避けちゃうな。

え？酷いんじゃないかって？まあ、そりゃ傷つきたくないですから。ちよつと話がずれたけど、このまま沈黙が続くのはいけない。

何か話さないと！

「すみません。・・・でもいつか思い出しますから！」

うわ！思い出すなんて、自分どんだけのホラ吹きなんだ。

思い出せる確証なんてどこにもない。でも、そう言わずにはいられなかったのだ。

「そうか、ありがとう。」

イケメンは私を、抱き締めたまま静かに笑った気がした。

ん？もしか、どうせ出来ないだろうとか思ってるんだろうか。

まあ実際そうだけど。

ふつ、と肩の重みがなくなったかと思えば、イケメンはこちらに綺麗な青い目をむけ寂しく笑いながら、こう言った。

「そうゆうところは変わらないんだな。」

ん？どういうことだろう。すぐ謝るところ？ホラ吹くところ？
もしか私、空白の9年間、相当の嘘つきだったの？

え？うそ。まじでか。じゃあ嫌われ者になってる感じなのか！？
どうしよう。今までは何とか学校でも低姿勢だったからかいじめられたりはしなかったけど、
もしやこつちの世界では、吹っ切れて悪態つきまくってたとか？
イヤ、でもそこまで私強くないし。そんな大層なこと出来ないし。
えええ？何なんだろう。

「え？え、な、何？何々？？何が変わらないんだ……。」「

いつの間にか独り言を吐いていたらしい。
それを聞いたイケメンが笑い出した。

「え？ちょ、どうしたんですか？！」

「いや、やっぱり可愛いなと思って。」「

イケメンが腹を抱えながら、こう言う。いや、さっきのシリアスモードはどこへと？

まあいいや。笑ってるほうが好きだし。

「いや、可愛くないです。」「

イケメン目がおかしいんじゃないか。

私の容姿は良くて中の中だ。そんな私が可愛いわけがない。

「いや、すつごく可愛い。」「

そう言いながら、イケメンは顔を近づけてくる。
え？何！？？とと思っている間に私の唇に何かがふれた。

・・・キスされた！？うそッ。

そう思ったら顔が一気に赤くなる。な、なんてことしてくれるんだ！

「そういう反応とかすっごく可愛い。」

え？こういう反応？どこがだ。ようわからんわ。

「よくわかりません。」

「大丈夫だよ分からなくて」

そうですか。それなら気にしないでおきます。

「俺、そろそろ行かないと。」

え？う、嘘。行っちゃうんですか！？

もしかしたら、この人以外に嫌われてるかもしれないのに！？
そんな・・・どうしよう、私、心が壊れそう。

「大丈夫だよ、ミワの世話をいつもしているメイドには、話しておくから。」

え？今、メイドって言わなかった？？

メイドってあれだよな？おかえりなさいませご主人様、の人だよな？
うそだろ。すごいな！

「じゃあ、行ってくるよ、愛しの奥さん。体には気をつけろよ。」

そう言いながら頬にキスをして、イケメンは部屋から出て行った。
いやあ、何が何だか全くわかんないわ。

私って嫌われ者！？（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます！

感想やアドバイスなど送ってくださいると嬉しいな、なんて思ってた
り・・・

はい、すみません、うざったいですね。

それにしても、いやー、よく2話目を出したものだ。

自分でも驚きですww

あ、イケメンの名前でしょう。[↑]

ケルベロスとか、クリドフとかしか思いつきませんww

とりあえず心は安泰です。（前書き）

お気に入り登録、感想ありがとうございます!!
いやーまさかこんなにたくさんの方が読んでくださるとは・・・。
本当に現実なのでしょう↑ 嬉しすぎます（*、D、）

とりあえず心は安泰です。

イケメンが部屋を出て行った後、私は暫くベットの上で固まっていた。

うーん……。本当に信じられない。

今、頭の中が混乱していて何が何だか分からない状態だ。

だって、気付いたら別の部屋にいて、人妻で、おまけに妊娠しているんだよ！？

もしかして、これは夢なのだろうか？？

日頃のストレスによる悪戯か？？

真相を確かめたくて、私は頬をつねってみた。

「いでエエ」

なんだ。すごい痛いじゃないか。思わず、「て」に濁音がついてしまったよ。

どういうことだ……。

もしかこれは夢ではないの！？

リアルなの！？ 本当に！？

いや、確かにイケメンに抱きしめられた時とか、キ、キスされた時とか感覚あつたけど！

あつたけれども！ それとこれとは別だよね。

うーん……。 じっとしていたら、なんだか急に現実味を帯びてきた。

私が26で人妻で妊娠してることは受けがたいけど、

ここが私の暮らしていた日常とは違うことは、この豪華な部屋のお蔭で理解できた。

まあ、なんといたて私は適応能力に優れているからね。

この前パソコンの適応能力診断で優れてるって言われたし。

そんなことはどうでもいいんだけど、これから私はどうしていくべきなんだろうか。

イケメンのことは何も知らないし、そのほかの人たちともどう付き合えばいいのだろうか。

あ、そういえばメイドさんが来るらしいけど、その人も私のこと嫌ってるのかな。

あー人と接するのは嫌いじゃないけど、私、話すの苦手だからなあ。。。

どうしようかなあ。とりあえず睨まれたら頭でも下げてひたすら低姿勢でいくか。

え？ビビりすぎるんじゃないかって？そんなの知っています。

でもそれしか方法ないんだよ！！あーどうしよう。本当にどうしよう。

もー心が壊れるよ。これ胎教によくないよね、きっと。ごめんね赤ちゃん。

こんなお母さんでごめん。というか本当に赤ちゃんいるのか？

おなかペツタンコだからあまり実感がわかない。

うーん。。。はたして本当なのだろうか。もしや聞き間違いとか？その可能性もあるよね。まあ分からないけど。

。。。それにしてもこの部屋広いな。小柳家が丸々入ってしまいそうだよ。

部屋を見渡していたら、大きな鏡に目がいった。

そういえば私26になっちゃったから、どこか変わってたりするのかな。

ちよっとワクワクしながらベットから降り、鏡の前に行ってみる。

鏡に映った自分の姿は。。。あんまり変わっていなかった。

なんだつまんないや。どうせならもつと綺麗になってほしかったよ。ちえ、ふつう肌が綺麗になってたり、胸が大きくなってたりするもんじゃないの？

まあ、26だからお肌も丁度、曲がり角かもしれないけど。

でも大体そうでしょう。これが私！？的な展開がふつうでしょ。

つまんなすぎるから。ちょっと期待してたのに、何なの、この何とも言えない寂しい気持ちは。

ガチャ。

うおっつ！そんなこと思ってたらド、ドアが開いた！もじゃ・・・

「失礼致します。」

ドアからやってきたのは水色の髪の涼しげな美女だった。

う、うわあ。凄いきれいな人だあ・・・。思わず見とれてしまうくらい綺麗。

瞳の色は遠くてよく分らないが、スタイルといい顔の造作といい素晴らしい。

な、なんだこの美女。もしやメイドの方！？

メイドの方（多分）はこちらによって来て、

お体にさわりますから、とかなんとか言いながら私をソファへと誘った。いざな

「本当に覚えていらっしやらないのですね・・・。」

え・・・。私こんな美女を悲しませちゃったよ。

どうしよう。謝ったほうがいいよね？てか謝るべきだよな。

「申し訳ありません。」

うん。本当にごめんなさい。

美女を悲しませるなんて、小柳美和、一生の不覚。

「謝らないでくださいませ。カイト様から話は伺っております。」

美女は目を優しくしながらこういった。

な、なんて優しい方なんだ！！

嫌われたらどうしようとか思っていたけど、この人すごく優しい。よかったー。とりあえず心は壊れずに済むよ。

「そうなんですか。ありがとうございます。」

ほんとうに、ありがとうございます。優しくてありがとうございます。す。

これほど感謝したのは久しぶりだ。

まあ、私のこれからが懸っていたし。

「ということは、自己紹介しないといけませんね。

私、メイサと申します。ミワ様の身の回りのお世話をさせていたいております。」

そういつて美女、もといメイサさんは綺麗なお辞儀をした。

ほう、そうなのか。やっぱり私はこんな美女の身の回りの世話をさせていたんだな。

なんか申し訳ない。普通ルックスからいつて逆だよな。私が召使みたいな役割だよな。

「私は小柳美和です。あの、こんな私のために働いてくださってありがとうございます。」

知っているだろうけど挨拶しながら頭を下げた。

やっぱり挨拶は基本ですから。これないといけませんから。

「そんな、頭をお上げください。私ミワ様のお世話ができて本当に
光栄なのですから。」

お世辞だとしても嬉しいことをいつてくれるな！メイサさんは。

いやー言葉だけでなく目まで優しそうに言ってくれると安心します。
よかったです。優しいメイドさんで。

とりあえず、私の心は安泰です。

とりあえず心は安泰です。（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます！

美和ちゃんへタレすぎますかね・・・。

そういえば、イケメンの名前が出てきましたね。

悩んだのですが、とりあえずカイトにしておきます。

もしかしたら変わるかもしれない・・・。

↑

感想やアドバイスよかったら送ってください^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6327q/>

お目覚めはイケメンから

2011年2月20日07時05分発行